

キーツ研究 (その二)

——“The Eve of St. Agnes” について——

高橋 千夏

目 次

まえがき

I 「詩人の性格」

II 聖女アグネスとその祭

III “The Eve of St. Agnes”

(1) I~VIII

(3) XXI~XXVII

(5) XXXVII~XLII

(2) IX~XX

(4) XXVIII~XXXVI

むすび

あとがき

まえがき

「聖アグネス祭の前夜」というキーツの物語詩ときけば、誰でも現実離れのしたロマンスと思うだろう。たしかに高度に幻想的な恋愛詩である。然し、実はしっかりと現実結びついていて、reality と imagination が早い速度で互に作用¹⁾し合っている作品である。光と影、冷たさと温かさ、愛と憎しみ、生と死などを組み合わせ、調和のある安定を保っている。聖アグネス祭前夜の伝説も、民話として語る場合には、その事柄だけが伝わって終るのであるが、詩は事実を越えた次元を自由に展開する。キーツがシェイクスピアの “Romeo and Juliet” や “Hamlet” を評して、愛と神聖なロマンスの精神に溢れている詩人の心を表わした詩であるとし、その喜びは限りもなく、自由自在におもむくままである、と言っている。 “It knows no stop in its delight, but ‘goeth where it listeth’ — remaining, however, in all men’s hearts a perpetual and golden dream.”²⁾ ‘goeth where it listeth’ はヨハネ伝3章8節に ‘The wind ³⁾ bloweth where it listeth’ とあるのを思い合わせると、偉大な詩人の心は思いのままに働くということであろう。更に人間の情熱も愛情も詩人の力によって高められ美妙的なものとなり、永遠に人間の心に美しい夢を残してくれるのだと云っている。「キーツ研究」(その二)として、キーツはどのような夢をもたらすか、“The Eve of St. Agnes”を取り上げてみたいと思う。

I 「詩人の性格」⁴⁾

同じローマン派詩人の中でも、自己を強烈華麗に歌った Byron や革命的思想や自由を歌った Shelley と異って、キーツは自己の芸術に対して忠実な徒であった。1817年11月22日付 Benjamin Baily 宛の手紙は、キーツの考え方を豊富に含んでいる。「天才とは中性的知性という多量の素材に作用するある靈妙な化学薬品と同様に大したものなのですが、天才には個性もなく、又はっきりした性格ありません。」⁵⁾と云っている。それから約1年後、1818年10月27日に Richard Woodhouse 宛の書簡には前より遙かに明瞭に 'Poetical Character' について、キーツ自身もその一人であると言い、詩人の性格について自分の意見を披瀝している。その一節を引用してみよう。

"As to the poetical Character itself —中略— it is not itself — it has no self — it is every thing and nothing — It has no character — it enjoys light and shade ; it lives in gusto, be it foul or fair, high or low, rich or poor, mean or elevated — It has as much delight in conceiving an Iago as an Imagen."

『詩人の性格』そのものに就いて言うと—中略—⁶⁾それ自体がないのです、一詩人には自己がありません——言いかえると、詩人の性格は万物一切であり、又無でもあると言えます。詩人には自己の性格というものが無いのです。光も影をも楽しむのです。それは美しいものであれ、醜いものであれ、又身分の高貴下賤を問わず、貧富の差別もなく、又精神が高潔であろうと下劣であろうと十分に味い喜ぶのです。イヤーゴウのような人物を考える時も、イモジェンのような女性を創り出す時もひとしく詩人の心は躍如としてくるのです。」と述べて、それ故に高德の哲学者はショックを覚えるだろうし、一方カメレオンのように自由自在の心をもつ詩人は、なんでも大いに楽しむというものであると説明している。両極にわたる事物にでも関心をもつことは、他者の中にはいることであり、理解し認識することである。ここに詩人の自己にとらわれない自由がある。更にこの手紙は重要なことをかき記している。

"A poet is the most unpoetical of any thing in existence ; because he has no Identity — he is continually in for—and filling some other Body —"

「詩人は実存するものの中で、一番詩的でないものなのです。そのわけは詩人には同一性というものが無く、絶えず何かに向っていて、他のものを満しつづけるからなのです。」太陽も月も、海も、又衝動的な生物である男も女もみんな詩的であって、不変な特質をもっていると書いている。このような詩的態度を先づ理解することが、キーツの詩を理解する上に重要と思われる。この手紙の前記中略の箇所 "That sort distinguished from the wordsworthian or egotistical sublime;" に見られるように、キーツはワーズワース風とか自己中心的尊厳というものとはっきり区別して別のものを、詩人の本分と考えていた。彼は詩人を志した初期の頃はワーズワースに特に敬意を表し、「靈魂不滅の歌」⁷⁾などから多大の感銘を受け、年を重ねるに従って「哲学的な心」を体得することが必要であることもワーズワースから学んだ筈であ

ったが、後になって彼は知的自己意識が強すぎるとしてワーズワースを egoist と考えるようになった。

「一切であって、又無でもある。」という境地は東洋の哲理にも通うものである。非常に靈的ともいえる。シェイクスピアの圧倒的な美しさに深く没入したキーツは、シェイクスピア的なもの——即ち “Negative Capability”⁸⁾ が詩人の本質であると考えた。1818年始めにはこうした「否定的能力」がすでに捕えられていたことがうかがえる。「あらゆるものの中にひそむ美の心」へ浸透するのはどのような状態であったか、その説明は至難の課題である。彼の作品に注意深くはいりこむより外はないが、精神的にも肉体的にも苦悩や焦慮、落膽、虚脱の形で長く空転したことも確かであろう。自我を滅却して、彼独特の詩的境地となり、空想力は旺盛に働き、その上知力が強烈な輝きとなって一日何十行もの詩を一気にかけるというのは、矢張り天才と云わねばなるまい。詩的靈感は古典から吹きこまれ、豊麗な色彩はスペンサーの「仙女王」から学び、詩作態度はシェイクスピアを師としたといわれるが、選びとった言葉で内容を深め、たくみな韻律によって音楽的效果を高めて、美の世界を表現することができたのは技巧の上から云っても詩人としての資質に恵まれていたといえよう。又 Robert Gittings が彼の著 “John Keats” の19章で述べているように、キーツは中世のフレスコ画とか B. R. Haydon の画室でみた古い版画や、又ゴシック風の建築などから、無限の想像力を働かせて美なるものを彼の詩作へ移入することもできた。詩のいのちはすぐれた詩人の特質から生れる。

II 聖女アグネスとその祭

Agnes は紀元305年ローマの皇帝 Diocletian がキリスト教徒を弾圧した際、その残忍な迫害にも屈せず殉教の死をとげた13才の少女である。後にローマ教皇教会によって聖人に列せられ、彼女の墓の上には立派な聖堂が建てられたと云われている。ローマにある二つの Agnes 聖堂の中の一つは、Diocletian の後にキリスト教信仰を公認した Constantine 大帝の娘 Constantia によって建立されたと記され⁹⁾ ている。平安女学院も St. Agnes' School という英語名をもって、烏丸下立売角の聖アグネス教会は平安女学院のチャペルでもある。Agnes とはギリシア語で「仔羊」のことであり、「純潔」「貞節」を意味している。聖女アグネスの殉教の日とされている1月21日が毎年祭日となっている。平安女学院の創立記念日もその日と定められて特別の礼拝が行われる。開校当時、明治8年(1874)には日本名を照暗女学校と称し、暗きを照らすキリストの光を意味して名づけられたのであろうが、海外の人たちは日本のミッションスクールとして St. Agnes' School の方が遥かに印象深かったことであろう。聖女アグネスは更にローマの長官であり奉行でもあった人の子息から求婚されたが拒否したことも加わり、二重の意味で極刑が加えられた¹⁰⁾とも記録されている。

この様に処女殉教者であるアグネスが、「清潔」「純潔」「貞節」の象徴であることは理解できるが、一方にこの祭の前夜については古くから言い伝えられて来た説話がある。聖アグネス祭前夜には少女の夢に未来の夫が現われるというのである。遠くは10世紀頃、ペルシャ方面か

ら伝わったアラビアからの多数の話が加わったという千一夜物語にも、又イタリア詩人ボッカチオのデカメロンにも、この伝説と相通ずるものがあるので、キーツは恐らくフランス語の訳本を読んだのだろうと云われている。その出典を探ろうとして、M. R. RIDLEY は快著 KEATS' CRAFTSMANSHIP (A Study in Poetic Development) p.103 でさまざまな出所らしいところを述べている。キーツは当時流行作家であった Mrs. Radcliffe¹¹⁾ の小説にヒントを受けたことは殆んど間違いないとされている。その他に、Brand's Popular Antiquities とか Burton's Anatomy of Melancholy などにも出典の一部になりそうな記述が散見するといわれているが、要するに次の四点にまとめることができる。(一) 処女が一日断食して何も食べないこと。(二) 彼女が後を振り返って見ないこと。(三) 言葉を口にしてはいけないこと。(四) 清潔な床に仰向けに静かにやすまねばならぬこと。これらは共通点としてみられる儀式的要素なのである。キーツはこうした民話とも又は迷信とも思えるものを骨子として "The Eve of St. Agnes" という美しい物語詩を書いた。ハーバード大学の Widener Library に蔵されているキーツ自筆の原稿は有名である。尚、Marquess of Crewe 所蔵の Woodhouse による写本二種や又弟 George Keats の写本として英国美術館に残っているものなど、重要な資料があってそれらを関係対照しながら多くの研究がなされている。それらの資料によってキーツが何回となく推敲を重ねて苦心をした跡を辿ることができる。

「聖アグネス祭の前夜」につづいて「聖マルコ祭の前夜」にも筆を染めたが、惜しいことに未完のまま断章に終わっている。1819年1月頃からこれらの物語詩を書いているが、Chichester とか Winchester¹²⁾ とか英国の古く床しい伽藍のある町を訪れて、歴史の残したものの美しさとそこに漂う静けさから、中世的魅力にとりつかれて、或いは古いイギリスへの憧憬の念に迫られて、詩を書き出したものと思われる。前夜祭では、どこの国でも多彩な催や宴会、儀式的な行事などが行われて祭の前の気分を高めるものであって、聖アグネスの前夜祭に限らず、時代や場所によってさまざまな伝説や迷信が伝わっているものである。尚初期の頃、聖アグネス祭の当日は St. Agnes 聖堂においては法皇が出席され盛大なミサがとり行われる中で、毎年二匹の仔羊が祝別されてその羊毛から大司教の祭服が作られることになっていた¹³⁾ そうである。

III "The Eve of St. Agnes"

(1) I~VIII

ギリシア神話を題材にとった雄大な詩である "Hyperion" を1819年1月に中断して、キーツは何故純粋に浪漫風な甘美な恋物語を書きはじめたのだろうか。その頃もう一作 "Isabella" も書いたが、その物語は情熱的ではあるが暗く悲哀感が盛られているのに引きかえて、この "The Eve of St. Agnes" は優雅で色調に富み風格がある。壮重な長篇詩に行き詰ったキーツが、気分を転換して人間が共通にもつ美しいものへと、ごく自然に筆を運んだのが、稀にみる整った形となり詩人の本領を発揮した作となったといえよう。Amy Lowell は「ハイペリオ

ン」に満足のいかなかったキーツは中断して、ballad story 風なものを彼にふさわしい角度から漸新な物語詩にしようと挑んでみる 気になった¹⁴⁾と書いている。Walter Jackson Bate は「ハイペリオン」第三巻に向う時行き詰っていた彼は12月から1819年1月18日頃までの間に Isabella Jones という夫人に会って 聖アグネス祭前夜の 伝説をきき、この物語詩を書く気が 起った¹⁵⁾とかいている。

この詩を読んでいて誰でも気づくのであるが、シェイクスピアの “Romeo and Juliet” からの幻影が、キーツの頭の中にはいつてきて、知らず知らずの間に影響を及ぼしていることである。明らかに対比できる箇所を取り上げてみたいと思う。

.

「聖アグネス祭の前夜」第一節は極度の寒さを描写した節で始る。ふくろうや野兎のさまをみても凍る寒さを耐えている。祈祷僧の指は痺れ、吐く息は香炉から立つ煙のように音もなく天へ上る。bitter cold と silent そのものの舞台である。全篇を通じて Spenserian stanza を用いて、8行は弱強五歩格、9行目は弱強六歩格、押韻形式は a b a b b c b c c となっている。cold, fold, told, old と [ould] の音が四たび響く脚韻は、いかにも寒さに凍えた空気にふさわしい。Ⅱ・Ⅲ節に出る やせおとろえた 老僧が燭台をもって 帰る様子は meager で barefoot で wan である。シェイクスピアの作「ヘンリイ六世」の中の幽霊¹⁶⁾も meager, pale and bloodless であり、「ロメオとジュリエット」の中の apothecary の容貌も meager¹⁷⁾とある。厳寒に素足とは難行苦行に耐える僧の姿を描いたものであろうが、おなじく「ロメオとジュリエット」の中の修道士も barefoot¹⁸⁾とある。辛うじて生きているようなこの僧が既に死者となった人達の彫像や錆かたびらで身を固めている騎士達の像が並んでいる側廊を、おぼつかない足取りで出ていくのである。亡き人の彫像が “in dumb orat’ries” で祈ると表現したり、冷たい像も心痛む思いであろうと、血の気のないものに温かい思いをよせる対照的な意味合いが流れる。

折から聖アグネス 祭前夜のことなので 酒宴が開かれるらしく、突然に囁きと音楽が鳴り渡る。然し歓楽の世界を他にこの僧は夜中眠りもやらず罪人の魂の為に、灰に座して懺悔の祈りをするのみである。静寂が破られてⅣ節にはいる。参会者たちのきらびやかな動的な背景がかぶ。“Music’s golden tongue” や “The silver, snarling trumpets” は音を出す金属楽器の感覚的效果を出している句である。静寂と音響、老いと若さ、歓楽と懺悔というようにキーツははじめから対照的なものを組み合わせている。然し彼が得意とするところは34～36行に見られる大きな瞳をみはって長押（なげし）に頭をもたせかけている天使達の彫刻美や、中世風の建築描写であろう。

V節後半で女主人公 Madeline が登場する。ひたすら聖アグネスの加護を祈りつづけている Lady の姿である。年上の女達から幾度となく聞かされた話を信じこんでいるこの城の娘なのである。Ⅵ節、50行目に “If ceremonies due they did aright ;” とあるように聖アグネス祭前夜に少女が未来の夫を夢にみたいのならば、間違いなくその儀式を行わねばならぬと心得

ている様子である。前記の迷信とも云われる 言い伝えをば、Madeline は神聖なものと思ひこんでいるさまが綴られている。

Nor look behind, nor sideways, but require /Of Heaven with upward eyes for all that they desire. (53—54行) 後も横も見ないで、彼女はただ恋人の姿があらわれることを切望し祈願するばかりで、他の物音は一切耳にはいらない。

She sigh'd for Agnes' dreams, the sweetest of the year. (63行) 彼女は刻々と迫りくるこの年で最も甘美な時を緊張して待ちのぞむ。彼女の動悸は速く心配げな表情である。この少女は深窓の姫ともいう身分であって、見せかけの恋や、憎悪、蔑視などとは全く無縁の世界にいる。彼女は神に捧げられるまだ毛を刈られない無垢な小羊 (lambs unshorn) (72行) も同然である。アグネスが仔羊を意味していたことは、前述の通りであるがローマ教会ではごく初期はに1月21日に二匹の仔羊が捧げられ、選ばれた尼僧達が仔羊の毛を刈ったという故事にもこの言葉は関係がある。13才の聖女アグネスが死をもって信仰を守り通した操の強さ故に、St. Agnes が清浄なものを好むのは当然なことである。憎しみの囁きを背景に出したのは明らかに「ロメオとジュリエット」の仮面舞踏会の場で、ロメオの姿を見つけたチボルトが怒って館の主人キャピュレットと会話を交わしている1幕5場を聯想させる。Ⅷ節70行に “Hoodwink'd with faery fancy;” とかかれているが hoodwink'd とは恋の空想にとらわれている恍惚状態を言うのである。Hood は頭布で覆われていて周囲がよく見えないので、聖アグネス祭前夜の迷信に夢中になっている姿がよく現われている言葉である。但し “Romeo and Juliet” の2幕4場の4行目に “Cupid hoodwink'd with a scarf,” (スカーフで目隠しされたキューピッド) とあるが、同じく恋は盲目という意味に用いられているのであって、出所と思われるこの言葉を取って Jack Stillinger は “The Hoodwinking of Madeline ; Scepticism in the Eve of St. Agnes” と題した論文を Studies in Philology LVIII (1961) に書いている。その中でマデラインは自分自身が盲目的に信じ込んだ夢に溺れてしまったという意味で hoodwinked dreamer¹⁹⁾ という語を使っている。

(2) IX~XX

Ⅸ節になってこの物語の男主人公 Porhyro が登場する。Madeline へ燃える思いを抱いて荒野を渡ってくるのであるが、月光を避けて玄関の影に身をひそませ、仇敵の目につかぬようにする辺は、「ロメオとジュリエット」の仕組みと同じである。一瞬でも敵地に滞るのなら血に渴えた鬼どもが襲いかかるだろうとサスペンスが流れる。此処には彼の一族を呪い罵る殺伐な連中ばかりで一人として情容赦をかける者はないと急迫してくる。唯一人何んとか手がかりをつけてくれそうな老女がいる。この配置は「ロメオとジュリエット」の乳母とよく似た存在であるがジュリエットの乳母は人間味豊かなしつかり者であって、キーツのえがく老婆は白髪病身で元気がない。然しポルフィロとの対話から成るⅫ節で話す老女の語気は強い。脚韻も fit, whit, flit, sit のように鋭い短音を連発して〔i〕音が急テンポで彼に立ち退くように迫る。ぐづぐづしていたら、今立っているその場の石が棺台になってしまうと言うのである。

“The Fall of Hyperion” の 108行にも、“die on that marble where thou art.” と書かれているが、「即座に命がなくなる」という意味を非常に具体的に表現している。敵に囲まれたポルフィロを放ってもおけず格子窓から月がさす小部屋へつれていく。複雑な建物の内部と思われるが、彼は何処にマデラインがいるのか教えてほしいと云う。老婆は聖アグネス祭の晩に彼に出会うなどとはと驚き、善き天使達が姫をおだまし下されと言って物憂い月の光の中で (“in the languid moon”), 生気のない笑い声を出す。ポルフィロは謎に包まれた様子である。やがて、今晚はマデラインが聖アグネス祭前夜の古い言い伝えを熱心に守っていることを知ると、彼の眼は brilliant に輝き出す。(XV節)

Flushing his brow, and in his pained heart/Made purple riot: (137—138行) 突然に開花したバラのようにポルフィロは歓喜の思いで上気して、彼の胸には深紅のときめきが起った。シェイクスピアの「ジョン王」三幕一場 247行にも riot という語があるが²⁰⁾、恋人の胸に希望的興奮が湧きおこり、老婆に策略を打明ける。XVI～XVII 節にかけて老婆 Angela はポルフィロにあなたは無礼な邪な方、さっさと出て行きなさいGo, go! と強く追い払おうとし、あなたは前とは人が違ってしまったとまで言うが彼はあらゆる聖人達に誓って(別稿では by the great St. Paul とある)、マデラインを絶体に傷つけないし、狂暴なこともしないと涙を流して懇願する。さもなければ大声を立てて敵共の耳を驚かして、立ち向うのだとおどす。アンデュラは遂に負けてしまって自分は今宵にもわからぬ老いの身のこと故、良かれ、悪しかれ、願うようにして上げようとポルフィロに約束してしまう。この点ロメオとジュリエットの電光石火な恋とは導入の仕方がかなり違っている。共通点はポルフィロが以前に敵方の領主の娘であるマデラインを見初めていたこと、マデラインもいつか彼に会ったことがあって言いよる貴公子を眼中に置かなかったこと、異っているのは、あくまでもマデラインは聖アグネス祭前夜の伝説を信じ、それによって現われる恋人を夢みて待っていることである。

XIX から XX 節でアンデュラは彼をマデラインの部屋へと手引きし、戸棚の中にかくれさせる。そして気づかれぬようにしながら比類もなく美しいマデラインを彼が覗き見るという計画を実行させる。その夜は妖精が働いて彼の夢をみることになるかもしれないと着想するのであるが、「ロメオとジュリエット」の 1 幕 4 場 53～96行にある有名な Queen Mub の空想をここに取り入れたものとみられる。ロメオは仮面舞踏会に乗り込む前にマキューシオがしゃべるマッブ姫に関する雄弁をきいてつまらぬ夢の話ながら胸さわぎがする。

While legion'd fairies pac'd the coverlet,/And pale enchantment held her sleepy-eyed. (168—9行) 夥たらしい妖精がベッドの上掛けの辺に集り、ねむ気を催しているマデラインの瞳に魔力をかけるというので、彼女はマッブ姫と同様のしわざによって男を恋してしまう結果になることを暗示している。

(3) XXI～XXVII

ポルフィロは遂に XXI 節に至ってマデラインの Silken, hush'd, and chaste; な部屋に辿りつく。綺麗な静けさがくり返して響く表現である四脚が皆 [st] と韻をふんでいるのをみて

も、柔かな言葉の音と意味が微妙である。恋の手引をした老婆は頭痛を覚えながら急ぎ去るのであるが、“Romeo and Juliet”の「恋の軽い翼を借り、あの塀を越えました。石のかこいも、恋をせくことは出来ません」(2幕2場66—5行)の方が遥かに劇的な暗示に富んでいる。聖アグネス祭の伝説にとりつかれた可憐なマデラインは憧憬から渴仰へ、更に信じ切った敬虔そのものの姿へとなってしまっていて、“like a Mission’d spirit, unaware:”(193行)と忘我の態が宗教的な言葉であらわされている。I. Stillinger はシェイクスピアにしても、ジュリエットの手をば“holy shrine”と呼び、ロメオの唇は「二人の赦らむ巡礼」であって、ジュリエットを“dear saint”と呼んでいるように、キーツもポルフィロを“A famish’d pilgrim, — saved by miracle”(339行)(奇蹟で救われたあの飢餓に瀕した巡礼)と書いているのは、誇張し過ぎであると述べている²¹⁾。どこの国でも形式はさまざまであるが結婚には厳格な儀式的習慣があり、誰もが真剣に取りくむものである。恋する若者達は自分の恋そのものを神聖視して、信仰的言辞でもって讃美を表現することになる。恋は誇張を必要とする。

灯を消してからの月光や、胸にあふれる思いがありながら、祈りの一声も口に出して唱えられないマデラインの様子を、舌を失った夜鶯に喩えている。キーツがギリシア神話に興味をもっていったことは彼の詩の特徴の一つであるが、舌を切られた Philomel が夜鶯の化身となった話を思い出す。

XXIV と XXV は多くの鑑賞家や研究家が賞讃する節である。特に感情を表面に出さないで、キーツ独特の安定した気分で美しい背景が前景となって展開してくる。「ギリシア古甕のオード」や「秋によせるオード」の格調を思わせる。“Keats’ Craftsmanship”をかいいた Ridley が論ずる²²⁾までもなく、優れた技巧が芸術性を生み出す例の一つであろう。三重のアーチ型になった高い窓の彫刻は圧巻である。古くは紀元前にさかのぼるかもしれない、又はギリシア、ローマの家具や調度の装飾芸術にみられる果物類や、花や木の枝、その他あらゆる美しい形や色合を持っている。

As are the tiger-moth’s deep-damask’d wings; (214行)にみられる印象は鮮明な色と形をあらわし、現代絵画の中でも新感覚であろう。対照的に薄水色の夕暗の中には家紋とか紋章、飾りや盾などが配置されている。舞台効果がクライマックスに達した XXV 節では聖アグネス祭前夜の月は最も美しく輝き出して、場面に与える月光の変化が鮮やかである。マデラインの豊かな胸を温かく照し、彼女は跪いて天よりの祝福を祈る。彼女の組み合わせられた手はバラ色にかがやき、銀の十字架はアメジスト色となる。彼女の金髪はますます艶やかとなり、聖人の頭上にある光輪ともみえる。翼こそないが新たな装いをこらした天使の姿であり、この世の汚れから一切のがれた純潔な乙女を眼前に見て、ポルフィロは気も遠くなるばかりである。(224行) この世のものでない美さに接して人間が感動するのは、詩人のとらえ方にもよるが、最も美しい場面でもある。同じく1819年の作「サイキーによせるオード」8行目にも、森の中でサイキーが花の草叢でねているのを見つけ、余りの美しさに“fainting with surprise”とその驚きを歌っている。

XXVI 節では夕べの祈りをすませた後、静かにマデラインは髪飾の真珠を取り、体温であたたかくなった頸飾りなどの宝石類を一つ一つと外していく。絹の衣裳は彼女の体の半ばまで滑り落ちて、丁度海藻の中に立つ人魚姫²³⁾を思わせる。独り舞台の劇は余程の名優が演じないと張りがなくなるが優れた詩は読者が演出家になり得る強味がある。眼覚めて眠っているようでもあり、物思いと空想に耽っているようでもある。Earl R. Wasserman は彼の著, “The Finer Tone”—Keats’ Major Poems—の中ではこの世のものならぬ美を理想として Sleep と dream を通して象徴し、死すべき人間の世界の現実性を awaken した reality とみている。マデラインは聖アグネスの魔力というか、伝説の世界を夢みているから、そのまじないが解けないようにと決して振り返りはしない。この掟を絶対に守らねばならぬことはこの物語詩では何回となく繰り返されている。警戒心とか前後を考えて周囲に注意を払うという気はない。一途に思いを遂げたい乙女心はこのような心理状態にはいるのであろうか、これら二人の男女に限らず理窟を越えた人情の秘義が描かれているのかも知れない。

次にマデラインが着がえをしてから、冷たい床につくさまを喩えて震えながら巢に這入る小鳥になぞらえている。夢か現の境から、心地よい眠りが次第に手足の先まで支配してゆき、苦痛と恵みの混合した意識の中で夢に落ちこむ描写が優れている。キーツは既に「眠りと詩」において片鱗を見せたように、又「夜鶯のオード」で歌ったような目覚めと眠りの中間にある詩人の精神状態を、痛みを伴いながら最も甘美な世界へと展開していく。「眠」りこそ詩人の住家なのである²⁴⁾。この節も幾度か細かな推敲が重ねられている。XXVII 節までは St. Agnes にふさわしい純潔な乙女の姿を高めてきた。最後の二行では開花しようとしたバラが雨も日光もよそに再び花卉を閉ざした蕾に喩えている。

(4) XXVIII~XXXVI

ポルフィロは XXVIII 節第一行で、ひそかに “Paradise” へ足を踏み入れる。パラダイスは清純な彼女のいる部屋であり、想像上の楽園でもある。彼が多くの苦難を経てやっと天国に辿りついたとみる人もあるが少し無理かもしれない。そこにはマデラインの脱いだばかりの衣裳がある。彼女は何んと安らかに眠っていることか。ジュリエットが地下埋葬室で仮死状態に眠っているのと異って生きている乙女の健全な寝息である。ねているサイキーとキューピッドの息づかいも穏やかであった。ソネット「煌めく星よ」に歌われている恋人の息使いも規則正しく静かであった。息は文字通りに生命の象徴である。

然し、XXIV 節からは、月は既に傾き、マデラインの部屋はほの暗くなってくる。始めからこの物語詩全体に著しい舞台効果を与えていた月の変化はいよいよ神秘的な雰囲気深める。賑やかな酒宴の物音も遠くなり、やがて鳴り止む。

マデラインがラヴェンダーの香りがする床ですやすやと寝ている間に、ポルフィロは砂糖漬の林檎、かりん、すもも、甘いひょうたんなどたくさんの果物を戸棚から出して盛りつける。更にシナモンの匂う果汁やマナ、なつめ等遠い異国の産物が飾られる。(XXX) 断食と後に出される豊潤な果物の対比がある。金銀の皿や籠に盛られたこれらの高価な果物は冷たい夜の静

寂に甘い香りを放つ。Filling the chilly room with perfume light. 一と1の音がさわやかである。(275行) ポルフィロは「わが美わしの天使よ、あなたは私の天国。優しい聖アグネス様に誓って、どうか瞳を開けて下さい、さもないと私の魂は痛みに堪えかねて、あなたの傍で眠ってしまいそうですと」囁く。(XXXI)

彼の手がマデラインの枕にふれる。マデラインの夢には何か影がよぎった、しかし乙女の眼はどうしても真夜中の呪文から覚めようとはしない。The lustrous salvars in the moonlight gleam ; (284行) 輝やく銀盆やテーブルカバーの金色の縁飾りが月光にほのかにうき出されている。ポルフィロ自身も幻想にとりつかれたように考えにふけるが、(XXXII) 目覚めてルート²⁵⁾を取り上げ、この上なく優しい唄を奏でる。むかしむかしプロバンス地方で ‘La belle dame sans mercy’ (無慈悲な美女) と呼ばれた民謡を彼女の耳許近くで歌うと、彼女は小さな呻き声を出す。キーツは1819年の4月21日に弟ジョージ夫妻へ宛てた手紙の中に同じ題の ballad 形式にした韻律の美しい詩を書いている。詩人は余程このような妖精の魅力と佻びしい自然の背景が気に入ったのか、恋に苦悩する自分の気持を歌ったのか、彼の作品の中でも “La Belle Dame sans Merci”²⁶⁾ は傑作といわれている。ポルフィロは弾く手を止めると彼女は喘ぐ様子であったが突然ぱちりと驚いて眼を開ける。彼も大理石のように蒼白になってひざまづく。(XXXIII) ここまで盛り上って来た最高の甘美な夢は永続するのであろうか。マデラインは眼を開けたもののなお夢の幻を追っている。夢は絶ち切れないが、痛ましい現実に至福の夢も願いも消し去ってしまったのに気付いて彼女は泣き出す。

And moan forth witless words with many a sigh ; (304行) わけのわからぬことを云い溜息ばかりつくさまは “La Belle Dame sans Merci” の中で美しい妖精が “And there she wept, and sigh’d full sore,” (30行) 泣いたり溜息をつく様子とよく似ていて、マデラインはまだ現実的な人間とはなり切れない。しかし彼女の眼だけは依然としてポルフィロに注いだままである。彼もまだひざまづき、手を合せ、憐みのまなざしで動くことも、話すこともできない様子である。XXXII~XXXIV 節まで、マデラインが夢みている間は、長母音 [i:] 音の脚韻が12回も続く。たゆとう気分から転じて XXXV 節にはいると彼女の方には俄然はっきりした言葉が出てきて、変化が感じられる。あの様に優しい誓いをきかせて下さって、誠実純粋なお方と思われたあなたが、どうして青ざめて、冷たくなってしまったのかと嘆く。若しあなたに万一のことがあれば私はどこへ行くのかわからない身であるから、こんな悲みの中に私を置き去りにしないで下さいと叫ぶ。至福の夢がさめたのちの不安と、何かに対するおそろしさに彼女は耐えられないほどである。いつの世にも行われて来たであろうが、女性の運命的転換がいかに切実に流麗に描かれている。ここに beauty と truth がある。

XXXVI 節はこの物語詩の中で最も詩的であって、内容も余韻も美しい。

he arose,

Ethereal, flush’d, and like a throbbing star
Seen mid the Sapphire heaven’s deep repose

Into her dream he melted, as the rose

Blendeth²⁷⁾ its odour with a violet, —— (317—321行)

マデラインの切々とした訴えをきくと、俄然ポルフィロにはこの世のものならぬ程の活力が湧き出て、「あたかも鼓動を打っている天空の星がサファイアの深い蒼穹に憩うように、彼女の夢の中にとけていった、丁度バラの香とすみれが溶け合ったように——」と云う意味の詩的表現となる。どんなに苦心し書き直したり、消したり加えたりした後この節に至ったかその成り行きは、Woodhouse が 1819年 9月 Taylor 宛にかいた手紙の中にうかがわれるので興味がある²⁸⁾。その中で先づキーツは伝説をわかりやすいように書き改めたことと、この節の最後の3行は、突如として気分の転換を読者に与えて終る効果があること、又キーツがわざとそれを意図したことがかかっている。更にこれに至る以前の原稿でやや官能的表現の多い同じ場面の詩行を評して、読者の興味は増すが、キーツは男性向きにかいたので、「女性には読んでほしくない」と云っていると述べている。そのような迂回はあったが、結局誰が読んでも周到な推敲に驚くばかりの手腕をみせる節となった。

meantime the frost-wind blows

Like Love's alarum pattering the sharp sleet

Against the window-panes ; St. Agnes' moon hath set. (321—323行)

霜を降らせるほど冷たい風が、恋人にしらせる警報のようにみぞれ雨となって窓ガラスをたたく。一瞬の変化で、聖アグネスの月は全く落ちてしまった。今までこの物語にさまざまな変化を与えてくれた月光は極度の荒天となり暗闇となった。読者は強烈な暗示を受けて不安に引き込まれる。純潔な月の女神であるアグネスの守護神 Cynthia は姿を消したものと比喩的に解釈される。

(5) XXXVII~XLII

XXXVII 節からは夢ではなく、すっかり現実に戻っていく。

"This is no dream, my bride, my Madeline!" (326行)

雪まじりの突風が荒れ狂っていると花嫁となったマデラインに告げる。辺の急変に気づき現実を知った彼女は「ああ、ああ、何んと悲しいこと、あなたは私を此処に見すてて去ってしまうのでしょうか」と悲痛な歎きを訴えて、どんな反逆人がここへ案内したのかときく。彼女の心は貴男の心の中にすっかり虜となってしまうからには、あわれな 'deceived thing' (だまされた者) であると云い独りぼっちの鳩であると歎く。

マデラインの悲しみに比べて、ポルフィロは実にスピードにみちた言葉で彼女に迫る。彼は美を護る心臓の形をした朱の楯ともなろう、又しろがねの宮である貴女の処で、長い労苦の末に憩うことができればと、忠実な騎士道的求愛の言葉がつづく。現実にかえったといってもポルフィロは 'ethereal' な力を出したり、奇蹟で救われた敬虔な巡礼に自分を見立てたりして、

信じてほしいといい、可愛い小鳥の巣を荒すようなことはしないと云う。

外界の天候は ‘frost-wind’ から ‘sleet’ へ ‘iced gust’ から ‘storm’ へ次第に激しく移っているが、この物語が一貫して幻想的であることは XXXIV 節第一行目の “Hark! ’tis an elfin-storm from faery land,” でわかる。妖精の国から吹いてくる小妖精が巻き起した嵐に紛れて逃亡できるから、これこそ恵みの風というものであるといい、朝も間近いからと次の強い調子でマデラインをうながす。

“Arise—arise! the morning is at hand; —” (345行) 更にこの節は9行のうち7行まで脚韻をスピードのある [i:] 音を用いて, “Let us away, my love, with happy speed;”

(347行) と急き立てる調子を出している。荒野の南方にはマデラインとの住家がそなえてあるというのである。

彼女はポルフィロの言葉をきいて、おびえながらも急いで支度をし、眠っている龍や恐しい槍をもった夜警のいる中を、暗を縫って広い階段を降り静まり返った宮殿風の建物を滑るように逃れて行く。扉には鎖で吊り下った燈がゆらめき、騎士や鷹などが織り込まれたアラス織の壁掛も嵐にあおられてはためく。(XL) 二人は幻のように広間を通り抜け玄関口まで音もなく辿りつく。門番は酒びんを転がしたままぎごちなく寝ている。番犬は賢しげな目で二人を見るが、マデラインを家人と見知っているのので吠えもしない。差し錠は一つ一つ外され、鎖の音もせず、鍵も開き、戸のちょうつがいを立てる低い音で XLI 節が終る。

最後の XLII 節を読んでではじめて、ああ、そうか、ずっと昔のことだったのか、この二人の若者が嵐の中を消えて行ったのはと気付く。あの晩は城のあるじは不幸な夢に苦しめられ通しだったし、軍人の客方は魔女や悪魔や亡霊などにうなされ通しの晩だった。老婆アンデェラは病のため、やつれ見苦しいさまで死に、祈祷僧も何度も何度も祈りを唱えているうちに、冷たい灰の中で息が絶えてしまった。第一節のような美しい冷めたさではない。老僧は既に吊らいた鐘が鳴ってしまった身であるとか (22行)、老婆は churchyard thing (155行) であると始に表現していたのを思い合せると、花嫁花婿のような花開く青春を最中にはさんで、生と死をこれほど明確に打出した詩も少い。脚韻も [ɔ:m], [ou], [ould] と重たく長い響きでこの詩曲は終わっている。

む す び

青春は短い、情熱と力にあふれて美しい。若さは人間に限らずすべての生きるものに与えられるものであるのに、その美しさを永く止めることは誰にもできない。若い恋人同志もやがては老醜化する。これ以上の真実はない。こうした生と死を対照的に置きながら、キーツは若い男女の恋物語を極度に盛り上げた。それもうすいベールをかぶせたような幻想的な美しさの中で dream と reality を象徴的に歌った。Amy Lowell は “Youth is more than age, energy worth more than meditation.”²⁹⁾ と幾世代もの若者達がこの詩を愛好する理由として評した。たとえ若者でなくても人間にとって命あるものは美しいのである。一たび真の美し

さを知った者にとって、それは永遠の喜びとなるのではないか。Endymion の冒頭の一句 “A thing of beauty is a joy for ever:” は知られ過ぎている程の金言ともいうべきであるが、その理解のし方は必ずしも人によって同じとはいえないだろう。尤も鑑賞は自由であるから、美を定義することは非常に困難なこととなる。

1817年11月22日 ベンジャミン バイリー宛の手紙をもう一度引用する。 “I am certain of nothing but of the holiness of the Heart's affections and the truth of Imagination—What the imagination seizes as Beauty must be truth—whether it existed before or not—for I have the same Idea of all our Passions as of Love they are all in their sublime, creative of essential Beauty ——” (私には人間の愛情の聖なること、想像力の真実であることほど確信できるものではありません。——想像力が美しいものとして捕えたものは——たとえ今までに存在したものであっても又は無かったものにしても——真実でなければなりません。というわけは私は人間のもつあらゆる情熱については、愛についてと同様の考え方をしているからです。そうした情熱は崇高にたかめられた時には、本質的な美を創造するものなのです。)

更にこの手紙は想像力に及んで、想像力はアダムが夢にたとえられている。アダムは目覚めて夢が真実であつたことを知ったと書いている。キーツは Milton の Paradise Lost, Book VIII (460—463) を思い出したのであろう。

Mine eyes he clos'd, but op'n left the Cell
Of Fancie my internal sight, by which
Abstract as in a trance methought I saw,
Though sleeping……

アダムは眼を閉じたけれども、彼の心の内なる眼、想像の室を開け放っておいたので、夢現の心地で、眠りながら見た……。というのである。それは、神が左の肋骨から創造し給うたと思われるこの上もなく愛らしく美しい女性を夢みたのである。

When out of hope, behold her, not farr off,
Such as I saw her in my dream, adorn'd
With what all Earth or Heaven could bestow

To make her amiable: (Paradise Lost, Book VIII) (481—484)

アダムは目覚めてみれば、天地が与えうる総てを飾った麗わしいイブの誕生を見たのであった。聖アグネス祭の夢は何を残したのであろうか。

1819年8月14日付バイリー宛の手紙に、キーツは「聖アグネス祭の前夜」と「イサベラ」をかいたと始めに記した箇所があるが、後の方で、彼は日に日に立派な作家というものは最も純粹な人間でなければならないと信じるようになって来たと書き、シェイクスピアと「失樂園」は素晴らしく、それらの中の句は恋人のように魅力のあるものとなっていると述べている。

「ロメオとジュリエット」と「聖アグネス祭の前夜」では青春のエネルギーとその美しさは同じであるが、前者は比喩的で明らかな結末がある。後者は象徴的³⁰⁾で暗示的余韻を残してい

る。キーツは24才の時の作、シェイクスピアは31才の作であって、共に青春の情熱と美しさ、更に人生の最も峻厳な生と死を、一段と優れた調べ³¹⁾で、永遠に奏でている。

R. Woodhouse はキーツに1818年、10月21日付で送った手紙³²⁾の中で、Endymion についての悪意のある世評を気にしないようにと励まし、愛情をもって常に着実な労苦を重ねて創作している詩人は、自らが選んだものを恐れることはない、彼の純粋な詩がもっている美は無尽蔵であって、unexhaustible と、inexhaustible と二度も重ねて、汲めども尽きない喜びがあるのではないかと、詩人に書き送っている。それにこたえて丁度一週間ばかり後にキーツからウッドハウスへ感謝の返信を認めた中に、第一章の「詩人の性格」について書かれているのである。それらを合せ読むと、キーツの詩人としてのイメージが彷彿としてくるのである。

あ と が き

前号に「キーツ研究」を書いた時は、彼の作品の中でも特に印象の深いソネットや、オードなどをとりあげて彼の詩の特徴を考えてみた。処女詩集にある Sleep and Poetry”にも興味を覚えた。今回は中篇 “The Eve of St. Agnes” の美しさにひかれて、調べる気になった。読めば読むほど、英詩は言葉と韻律を通して味うのでなければ、その価値が半減することが悩みとなった。読みも浅く、なまのシンフォニーを聴くかわりに、解説を読んでいるようなものになったことを恥ぢる次第である。黙読も勿論、思考と余韻を含むものであるが、繰り返えし、くりかえし声に出して読む時、人の心に伝わってくるものが詩であると思った。

註

- 1) “John Keats’s Dream of Truth” by John Jones, Chatto and Windus, 1969, p. 233.
- 2) “Keats and Shakespeare” by J. Middleton Murry, Oxford Univ. Press, 1964, p. 43.
- 3) Wind はギリシア語で spirit の意味もある。
- 4) Keats が 1818年10月27日付 R. Woodhouse 宛にかいた手紙の中にある “poetical Character” から採った。
- 5) Hyder E. Rollins: The Letters of John Keats 1814-21, Vol. I, Cambridge Univ. Press, 1958, p. 184.
- 6) *Ibid.*, p. 386-7 (I mean that sort of which, if I am anything, I am a Member; that sort distinguished from the wordsworthian or egoistical sublime; which is a thing per se and stands alone.)
- 7) Wordsworth の Ode on Intimations of Immortality 186行に “In the years that bring the philosophic mind.” とある。
- 8) 平安女学院短大紀要 第二巻の拙稿「勤勉な怠惰」p. 24参照。
- 9) A Dictionary of Christian Antiquities Vol. I, p. 43.
- 10) A Dictionary of Christian Biography Vol. I, p. 62.
- 11) Mrs. Ann Radcliffe (1764-1823) The Mysteries of Udolpho (1794) The Italian (1797) によって知られた小説家。
- 12) 1818年8月14日 ベイリー宛の手紙に、ここは美しい寺院があり、緑に囲まれたすてきな町であると書いている。

- 13) カトリック大辞典 (富山房) 参照。
- 14) "JOHN KEATS" by Amy Lowell, Vol. II, Archon Books, 1969, p. 226.
- 15) "John Keats" by W. J. Bate, Oxford Univ. Press, p. 435.
- 16) Shakespeare : Henry VI, III, ii, 162.
- 17) Shakespeare : Romeo and Juliet V, i, 40.
- 18) *Ibid.*, V, ii, 5.
- 19) Keats : A Collection of Critical Essays Edited by W. J. Bate, Prentice-Hall Inc., p. 83.
- 20) Shakespeare : King John III, i, 247 "make a riot on the gentle brow".
- 21) 註19) の Critical Essays の中で Jack Stillinger の "Scepticism in the Eve of St. Agnes" p. 75参照。
- 22) "Keats' Craftsmanship" by M. R. Ridley, Univ. of Nebraska Press, p. 149.
- 23) 別稿には Syren とあるが印象がよくないとして改められた。
- 24) キーツの "Sleep and Poetry" (Writ. 1816-17) 354-355行。
- 25) lute はギターに似た弦楽器で14-17世紀に用いられたが、この詩では宴の場からきこえるドラムや管楽器と対照的な効果をもっている。
- 26) 「つれなきたおやめ」、「無情な美女」「無慈悲な乙女」など邦訳はさまざまである。
- 27) 初稿に Marryeth と書かれたが同義と思われる。
- 28) "Keats' Craftmanship" では p.168-173.
- 29) "JOHN KEATS" by Amy Lowell, Vol. II, Archon Books, 1969, p. 169.
- 30) "The Finer Tone" by Earl R. Wasserman, The Johns Hopkins Press, p.135 に "It is symbolic, not allegorical" とある。
- 31) 前記、キーツがベイリーへ宛てた手紙の中で、この地上で幸福と呼ばれるものを 'in a finer tone' で歌おうと述べている。また註30) の Wasserman の著書もここから書名を採っている。
- 32) The Keats Circle: Letters and Papers (1816-1878) Vol. I, Harvard Univ. Press, 1865, p. 48-51.

紀要第二号「キーツ研究」正誤表

頁—行	誤	正
16—14	eagle eye	eagle eyes
19— 8	散らない前の	開かない前の
19—10	かかげる光	軽くかかげること
22—23	空想力	想像力
23—28	「転身」の頌序	「転身の頌」序
24—10	Beatuy	Beauty
24—12	ケズウィック	ケズィック
25— 8	Capacity	Capability
25—24	蕊	芯
25—26	Brawn	Brawne
26—31	anb	and
31—23	完璧とである	完璧である